

「カザク・ハン国」形成史の再考

——ジョチ・ウルス左翼から

「カザク・ハン国」へ——

長 峰 博 之

は じ め に

14世紀後半に始まるジョチ・ウルス⁽¹⁾の解体と再編のなかで、およそ15世紀後半にジョチ・ウルス左翼のオロスを祖とする王統のジャニ・ベグとギレイによって、いわゆる「カザク・ハン国」⁽²⁾が形成されたとされる。

この「カザク・ハン国」の形成については、16世紀半ばのモグール史料である『ターリーヒ・ラシーディー (TR)』⁽³⁾の記述をめぐって、これまで旧ソ連圏を中心にさまざまな議論がなされてきた。本稿の議論の中心となる史料なのでここに引用しておこう。

当時、アブールハイル・ハンがキプチャク草原において完全な権力を掌握しており、ジョチ家のスルターンたちを圧迫していた。ジャニ・ベグ・ハンとギレイ・ハンは彼より逃れ、モグーリスタンに着いた。[モグールの] エセン・ブガ・ハンは彼らを大いに歓迎し、モグーリスタンの西端であるチューとコジ・バシュ地方⁽⁴⁾を与えた。彼らがそこで平穩に過ごしていたとき、アブールハイル・ハンの死後にウズベグ⁽⁵⁾・ウルスは混乱し、多くの不和が起こった。[民の] 多くはギレイ・ハンとジャニ・ベグ・ハンのもとにいたり、彼らの多数さは20万人に達した。そして彼らに「カザク・ウズベグ (üzbak-i qazāq)」の呼称が起こった。カザクのスルターンたちの統治 (dawlat) の始まりは870 (1465/66) 年からであり——神はよく知り給う

——、940 (1533/34) 年にいたるまでのこの期間、カザクは完全な権力を掌握していた。[TR/Fard: 108-109]

この記述にもとづいて、先行研究はおもに「シャイバーン朝（アブルハイル朝）」、モグール・ウルス、ティムール朝といった対外勢力からの分離・独立の観点から「カザク・ハン国」形成の時期と場所について多くの説を提示してきたが⁽⁶⁾、現時点では、15世紀60年代半ばにセミレチエにおいて形成されたとする K. A. ピシューリナの説が広く受け入れられている [Пищулина 1977: 263; История Каз: 335]。

しかし、ここで問題となるのは、こうした「カザク・ハン国」の形成をめぐる議論の多くには、現在の「カザフ民族」の起源をめぐる民族史的な議論が重ね合わせられてきたことである。例えば、T. И. スルタノフは以下のように述べている。「1470-71年に興ったカザフ・ハン国は中央アジアにおける最初の国民国家（национальное государство）であり、それは前時代の人々や歴史的祖先ではなく、現在の民族によってつくられたのである」[Султанов 2001: 134]⁽⁷⁾。そのため、ジョチ・ウルス左翼から「カザク・ハン国」への継承性は部分的に認識されつつも、「カザフ民族」の起源としての新政権「カザク・ハン国」という概念がアプリアリに設定されており、循環論的な議論に陥ってしまっている⁽⁸⁾。

わが国では、まず佐口透氏が「カザク・ハン国」をジョチ・ウルスの「継承国家」として位置づけたうえでその形成史を概観した [佐口 1979a: 13; 佐口 1979b: 14-15]。その後、堀川徹氏が「ウズベグ族」と「カザク族」の分離についてモンゴル帝国時代に遡って考察した先駆的な研究を行ったが [堀川 1980: 53-63]、おもに両者の王統と所領の相違を指摘するにとどまっており、「カザク・ハン国」の形成史そのものに関する実証的な研究は以後も現れていない⁽⁹⁾。そのため、その形成史には依然として不明な点が多く、ジョチ・ウルスからの継承性についても十分な議論はなされていないのが現状である。

一方で、近年、ジョチ・ウルスおよびその解体と再編のなかで形

成された継承政権の概念そのものの再検討を迫る研究の潮流がある。赤坂恒明氏は、サファヴィー朝の諸史料などが「カザク・ハン国」をジョチ・ウルスの「“正統”なる後身」として位置づけていることを指摘しており〔赤坂: 244-245〕、このことは「カザク・ハン国」という概念を再考するうえで示唆的である。

次に、史料的問題についてふれておこう。遊牧政権は文字史料をあまり残さなかったため、これまで多くのジョチ・ウルスおよびその継承政権の歴史研究は、おもに外部史料（ティムール朝史料、マムルーク朝史料、ロシア年代記など）の断片的な記述に依拠してきた。しかし、後代になるとジョチ・ウルスの継承政権において独自の情報を含む諸史料が著されるようになり、すでにこれらの史料的价值に注目した B. П. ユーヂンや川口琢司氏などによる研究がなされてきている。これらの史料は、遊牧社会の口頭伝承の伝統を背景としつつも、史書としての性格を有するものであり⁽¹⁰⁾、そこに史実あるいは史実の反映を読み取ることは十分に可能である。また、ジョチ・ウルスおよびその継承政権内部の歴史認識が読み取れる点でも、大きな可能性を秘めている。

本稿のねらいは、上述のような諸史料のうち、17世紀初頭にカシモフのハンでオロスの子孫でもあるオラズ・ムハンマドに献呈されたカーディル・アリー・ベグの『集史（年代記集成。JT）』⁽¹¹⁾、また、18世紀のクリミア史料であるアブデュルガッファールの『諸情報の要諦（UA）』⁽¹²⁾をおもに用いることによって、ジョチ・ウルス左翼のオロスの時代から「カザク・ハン国」形成期とされるジャニ・ベグとギレイの時代までのこの王統の事績を再構築し、ジョチ・ウルス左翼から「カザク・ハン国」への継承性について実証的に考察することにある。そして、「カザク・ハン国」という概念を再考したうえで、改めて「カザク・ハン国」の形成というものをジョチ・ウルスの解体と再編のなかに位置づけてみたい。

第1章 ジョチ・ウルス左翼の再興

——オロスとその諸子の時代——

本章では、おもに先行研究に依拠しながら、ジョチ・ウルス左翼の形成と断絶、そしてその後ジョチ・ウルス左翼を復興したオロスとその諸子の時代について概観する。

1227年のジョチの死後、ジョチ・ウルスは、大きくは長子オルダとジョチの後継者となった次子バトゥに分与され、東部にオルダ家の左翼（オルダ・ウルス）、西部にバトゥ家の右翼（バトゥ・ウルス）が形成されたとされる⁽¹³⁾。当初、左翼は政治的独立を保っていたが、次第に右翼への従属を強め、14世紀初頭には本営をイルティシュ河流域からシル河中・下流域に移し [Allsen: 5-26]、スグナクを中心都市とした⁽¹⁴⁾。

1359年のバトゥ家のベルディ・ベグの死後、ジョチ・ウルスはハンが乱立する大混乱の時代を迎えた。以後のジョチ・ウルスの解体と再編については、川口氏が16世紀半ばまでにジョチ・ウルスの継承権である「ヒヴァ・ハン国（アラブシャー朝）」で著されたウテムシユ・ハージーの『チンギズ・ナーマ（ドゥースト・スルターン史。ChN）』を用いながら再構築を図っている。それによれば、右翼においてはバトゥ家に代わってジョチの第5子のシバン家の勢力が、左翼においてはオルダ家に代わってジョチの第13子のトカ・テムル家の勢力が浮上した。1369年頃に即位して左翼を復興したトカ・テムル家のオロス⁽¹⁵⁾は、スグナクを拠点として右翼征服の遠征を行い、短期間ではあるが2度サライを攻略した。しかしまもなく、ティムールの後援を受ける同じくトカ・テムル家のトクタミシュが現れ⁽¹⁶⁾、オロスとその後継者となった息子トクタキヤの死後にテムル・マリク／ベグ⁽¹⁷⁾を破り、ついには1380年にジョチ・ウルス再統一を果たした [川口 1997: 284-292; 川口 2002: 82-83]。以上のように、ジョチ・ウルスの再統一こそトクタミシュによって実現されたが、オロスはそれに先立つ左翼の「中興の祖」となったのである。

その後、トクタミシュとティムールは決裂し、1395年のテレク河

畔の戦いにおいてトクタミシュは敗走した。ここで、ティムール朝史料のヤズディーの『勝利の書 (ZN)』によれば、ティムールはこの遠征に従軍していたオロスの息子コイルチャクに「ジョチ・ウルスのハン位 (khānī-yi ulūs-i Jūjī) を与えるように命じた」という [ZN: 276a-b]。しかし、他の諸史料はコイルチャクの即位について伝えておらず、コイルチャクの貨幣も現存していない。逆に諸史料や貨幣資料は、トクタミシュやマングト部のエディギュ擁するトカ・テムル家のテムル・クトルクの活発な活動について伝えている [Сафаргалиев: 431-432]。一方、『集史』は、

父 [=オロス] ののちにそのウルスを彼 [=コイルチャク] が治めた。当時、カシュガル地方と敵対した。[JT/T: 60b]

と伝えるが、詳細は明らかではない。以上のことから、コイルチャクによるジョチ・ウルスの権力奪取は失敗に終わったか、短期間であったと考えるべきであろう。

第2章 バラクの征服活動

1 トクタミシュ政権崩壊後のキプチャク草原の情勢

本章ではオロスの孫でコイルチャクの息子バラクの征服活動について検討するが、その前にトクタミシュ政権崩壊後のキプチャク草原の情勢について概観しておこう。トクタミシュ政権の崩壊後、キプチャク草原の支配権を掌握したのはマングト部のエディギュ擁するテムル・クトルクであった。以後、キプチャク草原における覇権争いは、エディギュ擁するテムル・クトルクとその一門、のちに両者の関係が決裂してからはエディギュ擁する他のトカ・テムル家のハンたちと、政権奪取を目指すトクタミシュとその諸子との争いという様相を呈した。その後、1419年の戦いにおいてエディギュとトクタミシュの息子カーディル・ベルディは相倒れ、キプチャク草原において新たに台頭したのは、トカ・テムル家のウルグ・ムハンマドであった [Сафаргалиев: 428-449; 川口 2002: 86-87]。

2 バラクによるキプチャク草原東部の征服

バラクの征服活動については、すでに M. Г. サファルガリエフやスルタノフが詳しく論じているが、ここでは、『集史』や『諸情報の要諦』と他の諸史料の記述を比較検討しながら考察を進めていく。

『集史』はバラクの即位について以下のように伝えている。

[バラクは] 父 [=コイルチャク] ののちに君主 (pādshāh) となった。全ウルスを自身に服従させた。[JT/T: 60b]

バラクの名がティムール朝史料の『歴史精髓 (ZT)』と『両星の上昇と両海の合体 (以下、『両星の上昇』と略記。MS)』に初出する1419年以前の活動については不詳であるが、バラクはエディグユとトクタミシュー門の抗争に決着がつくのとほぼ同時に活動を開始しており、おそらくは父コイルチャクのあとを継いで権力奪取の機会を窺っていたと思われる。

『歴史精髓』と『両星の上昇』によれば、822年ラビーウ・アーヒラ月の末日 (1419年5月26日)、バラクはティムール朝のウルグ・ベグのもとに赴いて庇護を求め、サマルカンドにしばらく滞在したのちに帰還の許可を得たという [ZT: 704; MS: 269; Бартольд: 101-102]。こうして、ウルグ・ベグの後援を受けてキプチャク草原に帰還したバラクは、政権奪取に向けて活発な活動を開始した。バラクはウルグ・ムハンマドと鋭く対立する一方で、1422年にトカ・テムル家のフダイダートを破り、翌1423年にはヴォルガ河を越えてモスクワ南方のオドエフまで侵攻した [ПСРЛ: 238; Сафаргалиев: 449-450; Кляшторный, Султанов: 205-206]。826 (1422/23) 年には、バラクがウルグ・ムハンマドを破り、ウズベグ・ウルスの大部分を服従させたという報告がティムール朝にもたらされ [ZT: 869; MS: 354; Бартольд: 102]、828 (1424/25) 年には、「再びバラクが父祖の玉座 (masnad-i ābā wa ajdād-i khwīsh) に即位した」ことを表明する使者がウルグ・ベグのもとに到着したという [RS: 180; Бартольд: 102]。『集史』によれば、

[バラクは] 強力で、非常に権威のある、偉大な勇者であった。いたるところの諸地方を支配下においた。[JT/T: 60b]

という。このように、バラクは活発な征服活動を展開してキプチャク草原における覇権を徐々に確立し、ついには「父祖の玉座」に即位したのである⁽¹⁸⁾。

一方、マムルーク朝史料の『真珠の首飾り (IJ)』によれば、826 (1422/23) 年にも依然としてウルグ・ムハンマドが「草原地方の支配者 (sāhib bilād al-Dasht)」と呼ばれ、また828 (1424/25) 年にも草原地方においてウルグ・ムハンマドが優勢であったとされている [IJ/Qalmūt: 192, 247; IJ/СМИЗО: 501]。しかしこれは、マムルーク朝史料の関心事はキプチャク草原西部の情勢であり、ウルグ・ムハンマドの支配は西部に限られていたと解釈される [Сафаргалиев: 451-452]。830年ジュマダー・アウワル月 (1427年2月28日～3月29日) の書簡によれば、トカ・テムル家のデヴレト・ベルディはクリムとその周辺を、ウルグ・ムハンマドはサライとその周辺を、バラクは「ティムランク [=ティムール] の地に隣接する地」を支配したとされる [IJ/Qalmūt: 313; IJ/СМИЗО: 501-502]。ここに見える「ティムランク [=ティムール] の地に隣接する地」とはキプチャク草原東部のことであり [Сафаргалиев: 454]、すなわち、かつてのジョチ・ウルス左翼の領域はバラクの支配下にあったのである。

さらにここで、ウルグ・ムハンマドがオスマン朝のムラト2世に宛てた831年ジュマダー・アウワル月27日 (1428年3月14日) 付けの書簡について検討しよう。このなかでウルグ・ムハンマドは、かつて玉座をバラクに奪われたが、先年 (スルトノフによれば、829 (1425/26) 年) バラクとマンガト部のエディギュの息子マンスールから玉座と王国を奪い返したと述べている [Kurat: 8-11; Султанов 1975: 54-55]。ここからは、バラクとマンガト部のマンスールが同盟関係にあったことが窺われる [Кляшторный, Султанов: 207-208]。『諸情報の要諦』は、マンスールがバラクをハンにして仕えたとしており [UA: 276b; Трепавлов: 94]、『集史』によれば、バラクとマンスールはおじ・甥の近親関係にあったという [JT/T: 63b]⁽¹⁹⁾。以上から、この時期に両者は一時的ながらも接近していたと考えてよいだろう。エディギュ以来、チングス家とハン・ベグ関係や婚姻関

係を結ぶマンガト部の動向はしばしばキプチャク草原世界の勢力関係に大きな影響を与えるようになっていたが⁽²⁰⁾、オロス家もまたそのマンガト部と深い関わりを持っていくのである。

3 バラクの最期

キプチャク草原東部における覇権を確立したバラクは、828 (1424/25) 年にムハンマド・ハンなる人物を破り、829 (1425/26) 年にはジョチ・ウルス左翼の中心都市であったシル河流域のスグナクに接近した。翌830 (1426/27) 年、バラクは祖父オロスがスグナクで建築活動を行ったことを理由にスグナク領有を求め⁽²¹⁾、ウルグ・ベグと決裂した。両者はスグナク近郊の丘陵地帯に対峙し、激戦の末にバラク軍が勝利したのちに草原へ帰還したという [ZT: 906-907; MS: 376-380; Бартольд: 111-112]。ここでは、バラクがオロスの後継者としてジョチ・ウルス左翼の中心都市スグナクの領有を求めたことに注目しておきたい。

バラクがキプチャク草原に帰還してまもなく、諸史料はその最期について伝えている。『両星の上昇』は、832 (1428/29) 年にバラクがモグーリスターンにおいてスルターン・マフムード・オグランなる人物によって殺害されたと伝え [MS: 404]、サファヴィー朝史料の『世界装飾者史 (TJA)』は、831 (1427/28) 年にアミールたちが新たに擁立したマフムード・オグランなる人物がバラクを殺害したと伝える [TJA: 206-207]⁽²²⁾。サファルガリエフはこのマフムード・オグランをシバン家のハージー・ムハンマドに比定しているが [Сафаргалиев: 455-456]、『世界装飾者史』は別の箇所ではトカ・テムル家のクチュク・ムハンマドがバラク殺害後に即位したとしている [TJA: 207]。

一方、『集史』は以下のような情勢を伝えている。

「マンガト部」マンスール・ビー⁽²³⁾をバラク・ハンが殺し、その後、ある日、ハージー・ムハンマド・ハンをもバラク・ハンが殺した⁽²⁴⁾。[JT/T: 64b; JT/Березин: 156]

[バラクは、] ついには、イディル [=ヴォルガ河] の地におい

て、ジャイク [=ヤイク／ウラル] 河畔のサライチュク近郊での [マンスールの兄弟] カーディー、ナウルーズとの戦いにおいて死んだ⁽²⁵⁾。[JT/T: 60b]

また、『諸情報の要諦』はバラクとマンガト部の不和についてさらに詳しく伝えている。それによれば、バラクがマンスールを殺害したのち、マンスールの兄弟のカーディーとナウルーズはクチュク・ムハンマドのもとへ逃れた。のちに両軍はヤイク河とヤム河のあいだにあるカイナル・サクズ河において対峙し、クチュク・ムハンマド軍がバラクを戦死させ、マンスールの復讐をとげたという [UA: 276b-277b]⁽²⁶⁾。

これらの諸史料の比較から、バラクは草原に帰還したのちまもなく (スルタノフによれば、1428年 [Кляшторный, Султанов: 209])、マンガト部と結んだ他のチンギス家のハン (クチュク・ムハンマド) との抗争のなかに倒れたと考えられよう。

以上、本章ではバラクの征服活動について考察してきた。父コイルチャクののち、バラクは活発な征服活動を展開し、短期間ではあったが、かつてのジョチ・ウルス左翼の領域であるキプチャク草原東部における覇権を確立したのである。

第3章 ジャニ・ベグとギレイの

「カザク」的行為をめぐる

1 ジャニ・ベグとギレイのモゲーリスターンへの避難

バラクの死から本稿冒頭に掲げた『ターリーヒ・ラシーディー』が伝えるモゲーリスターンへの避難にいたるまで、諸史料はバラクの息子ジャニ・ベグとギレイ (オロスの息子トクタキヤの孫)⁽²⁷⁾の活動について具体的には伝えていない。この間、キプチャク草原においてはシバン家のアブールハイルが覇権を確立しつつあり、1446年にはスグナクをはじめとしたトルキスタン地方 (シル河中・下流域) を征服した [TAKh: 323a-323b; Ахмедов: 57-58; 堀川 1979: 67]。先行研究が指摘するように、こうしたアブールハイルの勢力拡大、とくにトルキスタン地方がその支配下に入ったことがジャニ・ベグ

とギレイにモグーリスターンへの避難を強いたとみてよいだろう
[Пищулина 1977: 255; 堀川 1980: 59-61]⁽²⁸⁾。キプチャク草原における抗争のなかで、一旦マー・ワラー・アンナフル政権のもとに避難するというのは、トクタミシュやバラクにもその前例を見ることができる。しかし、当時サマルカンドの支配者であったのはアブールハイルと関係の深いティムール朝のアブー・サイドであったため⁽²⁹⁾、ジャニ・ベグとギレイはモグーリスターンに避難したのであろう。

では、モグーリスターンへの避難前後のジャニ・ベグとギレイの活動について、諸史料の断片的な記述から検討してみよう。17世紀のジャーン朝史料である『神秘の海 (BA)』⁽³⁰⁾は、ジャニ・ベグとギレイのモグーリスターンへの避難について以下のように伝えている。

父祖伝来のくに (mamlakat-i mawrūthi) から顔を背け、彼ら [= ジャニ・ベグとギレイ] は異国への道を踏み出した。分別のある集団とともに、彼らはモグーリスターンへの道を選んだ。

[BA: 131a-131b]

この記述からは、ジャニ・ベグとギレイが、モグーリスターンへの避難以前にもある程度の勢力を有する「父祖伝来のくに」の統治者であったことが窺われる。『集史』は、

父 [= バラク] のウルスを彼 [= ジャニ・ベグ] が治めた。

[JT/T: 60b]

と伝えており、「父祖伝来のくに」とは、おそらくはかつてのジョチ・ウルス左翼の領域であり、バラクが一時期覇権を確立したキプチャク草原東部を含意しているとみてよいだろう。また、興味深いのは、ジャニ・ベグの同時代人とされる詩人アサン・カイグが、ジャニ・ベグがエンバ河とウイル河流域のマンガト部のもとを去ってモグーリスターンへ避難したことを厳しく非難した詩を残していることである [История Каз лит: 26-27]。ここからは、ジャニ・ベグがマンガト部と緊密な関係にあったことが窺われる⁽³¹⁾。

ジャニ・ベグとギレイがモグーリスターンの西端に滞在したとき、

『神秘の海』によれば、アブールハイルを恐れた兵たちが彼らのもとに避難するようになり、とくにアブールハイル死後にキプチャク草原で起こった混乱のなかでウズベグの兵たちの大部分がジャニ・ベグとギレイのもとに集結したという [BA: 131b; Пищулина 1977: 252]。本稿冒頭に掲げた『ターリーヒ・ラシーディー』の記述によれば、誇張はあるだろうが、その数は20万人に達したという。このように、キプチャク草原におけるアブールハイルの覇権に抗しきれず、一旦はモグーリスタンへ逃れたジャニ・ベグとギレイであったが、その後そこで徐々に勢力を拡大していき、およそ15世紀後半にいわゆる「カザク・ハン国」が形成されたとされる。そして以後、アブールハイルの孫ムハンマド・シャイバーニー、ティムール朝、モグール・ウルス、マンガト部といった諸勢力も絡み合っの1470～90年代のトルキスタン地方をめぐる抗争を経て、オロス家（ジャニ・ベグとギレイ、およびその諸子）はキプチャク草原における覇権を確立していくのである [Пищулина 1981: 110-120; 長峰: 8-14]。

以上が「カザク・ハン国」の形成とされるところであるが、先行研究はこの問題を、『ターリーヒ・ラシーディー』の記述や諸史料の伝える情勢にもとづいて、おもに対外勢力からの分離・独立という視点で考察し⁽³²⁾、そして、しばしばここに「カザフ民族」の起源をめぐる民族史観的な議論を重ね合わせてきた。しかし、本稿で述べてきたように、ジャニ・ベグとギレイはモグーリスタンへ避難する以前から「父祖伝来のくに」の統治者であり、それはオロスによって復興されたジョチ・ウルス左翼を継承する遊牧政権であった。この問題はどのように考えるべきなのだろうか。そこで次に、彼らが帯びた「カザク」という呼称に焦点を絞って検討してみよう。

2 「カザク」という呼称について

「カザク」という呼称の確かな語源については不明であるが⁽³³⁾、およそ13～14世紀頃から「逃亡者」、「放浪者」の意味で用いられるようになり、のちには現行の支配者に対する権力の要求者、およびそれを支持して略奪行為を行う集団を指すようになったといわれる

表 15～16世紀の中央アジア諸史料に現れる
「カザク」のおもな使用例

史料	成立年代	使用例
『両星の上昇』	15世紀後半	844 (1440/41) 年、「ウズベグ軍のうちカザクとなった (az lashkar-i ūzbak qazāq shuda) 集団」がマーザンダラーン地方を略奪。[MS: 501-502]
		851 (1447/48) 年、ウルグ・ベグは「カザクのウズベグたち (ūzbakān-i qazāq)」を監視するように命令。[MS: 604]
『選史・勝利の書』	16世紀初頭	ムハンマド・シャイバーニーが権力を掌握するまでの苦難の時期を「カザク期 (qazaqlıq)」。[TGNN/Акрамов: 273]
『シャイバーニー・ナーマ』	16世紀初頭	アブールハイルが権力を掌握するまでの苦難の時期を「カザク期 (zamān-i qazā-qī)」。[ShN: 5, 6]
『パーブル・ナーマ』	16世紀前半	「放浪時代 (qazaqlıq)」、「奔放な若者 (qazaq yigit)」。[BN: 16, 78]
『ターリーヒ・ラシーディー』	16世紀半ば	政争に敗れたワイス (ヴァイス)・ハンは「カザクの習慣 (rasm-i qazāqī)」によってモグーリスターン辺境に滞在。[TR/Fard: 91]
『チンギズ・ナーマ』	16世紀前半～半ば	ヒズルは黄金の天幕を壊して「カザクたち (qazaqları)」に分配。[ChN: 37] トクタミシュは「放浪・略奪を行い (qazaqlap)」、オロスの民を襲撃。[ChN: 41]

〔Doerfer; Barthold, [Hazai]〕。『ターリーヒ・ラシーディー』と『神秘の海』は、ジャニ・ベグとギレイが「カザク」という呼称を帯びるようになった理由について、彼らがウズベグ地方を離れてモグーリスターンにおいて放浪・略奪という「カザクの行為」を行ったため、と説明している [TR/Fard: 404; BA: 131b]⁽³⁴⁾。

しかし、15～16世紀において、「カザク」という呼称はジャニ・ベグとギレイ、およびその諸子に限定して使用されるものではなかった。上の表は、15～16世紀の中央アジア諸史料に現れる「カザク」のおもな使用例である。諸史料の記述からは、ジャニ・ベグとギレイが「カザク」の呼称を帯びる以前から、そして以後も「カザク」

という用語が一般名詞として、または動詞化して用いられたことが確認できる。つまり、ジャニ・ベグとギレイもこのような意味で「カザク」と呼ばれた集団の1つであったということである⁽³⁵⁾。

それでは、本稿冒頭に掲げた、オロス家に『「カザク・ウズベグ」という呼称が起こった』という『ターリーヒ・ラシーディー』の記述はどのように理解すべきなのだろうか。シバン家のムハンマド・シャイバーニーのカザク遠征（1509年）に随行したイブン・ルーズビハーンの『ブハラ客人の書（MNB）』によれば、当時ウズベグには3つの集団があり、それぞれシバン家、カザク、マングトであったという〔MNB: 41〕。本史料においては随所でオロス家が「カザク」と呼ばれており、おそらくはシバン家（ムハンマド・シャイバーニー）とオロス家（ジャニ・ベグとギレイ、およびその諸子）の抗争のなかで、前者の後者に対する他称として「カザク」が用いられるようになっていたことが窺われる。本稿冒頭に掲げた『ターリーヒ・ラシーディー』の記述は、同史料が成立した16世紀半ばには、オロス家に対する「カザク」という他称が広く定着していたことを示しているのである。

ところが一方で、『ブハラ客人の書』とほぼ同時期に成立したシャイバーン朝史料の『選史・勝利の書（TGNN）』や『シャイバーニー・ナーマ（ShN）』の記述からは、非常に興味深い特徴が看取される。これらの史料はシバン家とオロス家の抗争を詳細に伝えているが、管見の限り一度の使用例を除いて⁽³⁶⁾、オロス家に対して「カザク」という呼称は用いられておらず、「オロス・ハンの子孫、ブルンドウク・ハン（ギレイの息子）」〔TGNN/Or: 148b〕、「バラクの息子、ジャニ・ベグ」〔ShN: 12〕といったように系譜が付されているのみである。つまり、オロス家は「カザク」としてではなく、その王統によって認識されているのである。この興味深い事実は以下のように解釈できよう。イブン・ルーズビハーンの証言や『ターリーヒ・ラシーディー』の記述からは、確かに他称としての「カザク」がオロス家に対して定着していたことが確認される。しかし、当時のジョチ家の内部ではオロス家という王統による認識こそが重視されていたの

である⁽³⁷⁾。

また、17世紀初頭の『集史』においても、オロスを祖とする系譜とハンたちの事績を中心とした章が設けられつつも、「カザク」という呼称は一度も用いられていない〔宇山: 94〕。『集史』を献呈されたオラズ・ムハンマドは、当時「カザク」のハンであったテウエケルの甥にあたる人物であり、同史料の記述は大きな注目に値する。すなわち、『集史』の記述からは、17世紀初頭においてもオロス家の内部で「カザク」という自称は用いられておらず、そのオロス家という王統によって、いわば「オロス朝」ともいべき自己認識がなされていたという歴史の実態が浮かび上がってくるのである。

おわりに

本稿では、おもにジョチ・ウルスの継承政権内部で著された諸史料を用いることによって、ジョチ・ウルス左翼から「カザク・ハン国」形成への歴史的展開を再構築してきた。まず、14世紀後半に始まるジョチ・ウルスの解体と再編のなかで、トカ・テムル家のオロスによってジョチ・ウルス左翼は復興され、15世紀前半のバラクの時代には再びキプチャク草原東部の支配を確立したことを再検証した。その際、マングト部の動向が深く関与していたことも本稿で指摘したところである。次に、15世紀後半のジャニ・ベグとギレイのときに「カザク・ハン国」が形成されたとされるが、それはそもそも、オロスによって復興されたジョチ・ウルス左翼を継承する遊牧政権であったことを実証的に明らかにした。このことは先行研究においても部分的に認識されていたことであるが、本稿はそれを『集史』などの諸史料を詳細に分析することによって、また、これまで重視されてこなかったジョチ家内部の歴史認識に注目することによって論証したものである。諸史料の記述からは、オロス家の政権を継承したジャニ・ベグとギレイがシバン家との抗争のなかで「カザクの行為」を行い、それによって他称としての「カザク」という呼称を帯び、それがしだいに定着していったことが窺われる。しかし一方で、『集史』などの記述からは、当時のジョチ家の内部では「カ

ザク」という認識よりも、ジョチ・ウルス左翼を継承するオロス家（「オロス朝」）という歴史認識こそが重視されていたことが明らかになるのである。

このように見てくると、現在の「カザフ民族」の起源をめぐる民族史的観点からはもちろんのこと、対外勢力からの分離・独立という対外的な観点のみから、15世紀後半に新しく樹立された政権として「カザク・ハン国」という概念を設定する議論は、一面的で歴史的事実を反映していない。そもそも「カザク・ハン国」とは研究上の概念であるが、本稿で述べてきたジョチ・ウルス左翼の歴史的展開やジョチ家内部の歴史認識にもとづくならば、「カザク・ハン国」とは、14世紀後半に始まるジョチ・ウルスの解体と再編という変動のなかで、ジョチ・ウルス左翼を継承するオロス家の中核として形成されていった遊牧政権の概念として改めて捉えられなければならない。

最後に、以上のような結論を、ジョチ・ウルスの継承政権内部で著された諸史料を用いることによって得ることができたことを改めて付言しておきたい。これらの史料を有効に用いることによって、ジョチ・ウルスおよびその継承政権史の研究がさらに深化することが期待される。

本稿では、ジョチ・ウルス左翼から「カザク・ハン国」への継承性、「カザク・ハン国」という概念の再考に焦点を絞ったため、残念ながら政権内部の変動、とくに本稿で見てきたようなマングト部の動向やセミレチエを勢力下においたことなどによる政権下の部族の離合集散などの問題まで検討することはできなかった。今後の課題としたい。

史料

BA: Maḥmūd b. Amīr Walī, *Baḥr al-Asrār fī Manāqib al-Akhyār*, рукопись, ИВ АН Р. Узбек., No. 1385.

BN: Ṣāḥir al-Dīn Muḥammad Bābur, *Bābur-nāma (Vaḡāyi')*, ed. Eiji MANO, Syokado, 1995.

ChN: Ötämish Hājī, *Chingiz-nāma*, ed. Takushi KAWAGUCHI, Hiroyuki NAGAMINE, Supervision, Mutsumi SUGAHARA, Ötämiš Hājī, *Čingiz-nāma*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 2008, pp. 3-46.

IJ/Qalmūt: Badr al-Dīn al-‘Aynī, *‘Iqd al-Jumān fī Ta’rīkh Ahl al-Zamān*, ed. ‘Abd al-Rāziq al-Ṭanṭāwī al-Qalmūt, vol. 2, Cairo, 1989.

IJ/СМИЗО: Badr al-Dīn al-‘Aynī, *‘Iqd al-Jumān fī Ta’rīkh Ahl al-Zamān*, ed. В. Тизенгаузенъ, *Сборникъ матеріаловъ, Относящихся къ исторіи Золотой Орды*, т. 1, Извлеченія изъ сочиненій арабскихъ, Санктпетербургъ, 1884, pp. 475-502.

JT/T: Qādir ‘Alī Beg, *Jāmi’ al-Tawārīkh*, рукопись, ВОНБ Казанский государственный университет, Т. 40.

JT/Березин: Qādir ‘Alī Beg, *Jāmi’ al-Tawārīkh*, ed. И. Березинъ, *Сборникъ лѣтописей: Библиотека восточныхъ историковъ*, т. 2, ч. 1, Казань, 1854.

Kurat: A. N. Kurat, *Topkapı Sarayı Müzesi Arşivindeki Artın Ordu, Kırım ve Türkistan Hanlarına ait Yarlık ve Bitikler*, İstanbul, 1940.

MA: Anonym, *Mu‘izz al-Ansāb fī Shajarat Salāṭīn Mughūl*, MS., Bibliothèque Nationale, Ancien fonds persan 67.

MS: Kamāl al-Dīn ‘Abd al-Razzāq Samarqandī, *Maṭla’-i Sa’dāy wa Majma’-i Baḥrayn*, ed. ‘Abd al-Ḥusayn Nawā’ī, jild 2, daftar 1-2, Tehran, 1383.

MNB: Faḍl Allāh b. Rūzbihān Khunjī, *Mihmān-nāma-yi Bukhārā*, ed. M. Sutūda, Tehran, 1341.

ПСРЛ: *Полное собраніе русскихъ лѣтописей*, т. 11, Лѣтописный сборникъ, именуемый патріаршею или никоновскою лѣтписью, С.-Петербургъ, 1897, репр., Москва, 2000.

RŞ: Mīrkhwānd, *Rawḍat al-Ṣafā’*, ed. В. В. Бартольд, *Сочинения*, т. 2, ч. 2, Москва, 1964, pp. 178-196.

ShA: Anonym, *Shajarat al-Atrāk*, MS., British Library, Add. 26,190.

ShN: Kamāl al-Dīn ‘Alī Binā’ī, *Shaybānī-nāma*, ed. Kazuyuki KUBO, *A Synthetical Study on Central Asian Culture in the Turco-Islamic Period*, Grant-in-Aid for Scientific Research (A): 1994-1996 (Chief Reseacher, Eiji MANO), 1997, pp. 61-160.

- ShT: Abū al-Ghāzī Bahādur Khān, *Shajara-yi Turk*, ed. Le Baron Desmaisons, *Histoire des Mogols et des Tatares par Aboul-Ghāzi Bēhādour Khan*, t. 1, St.-Petersbourg, 1871, repr., Frankfurt am main, 1994.
- TAKh: Mas'ūd b. 'Uthmān Kūhistānī, *Tārīkh-i Abū al-Khayr Khānī*, MS., British Library, Add. 26,188.
- TGNN/Or: Anonym, *Tawārīkh-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, MS., British Library, Or. 3,222.
- TGNN/Акрамов: Anonym, *Tawārīkh-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, ed. A. M. Акрамов, *Таварих-и гузида—Нуҳрат-наме*, Ташкент, 1967.
- THS: Ghiyāth al-Dīn b. Humām al-Dīn al-Ḥusaynī, *Tārīkh-i Ḥabīb al-Siyar fi Akhbār Afrād Bashār*, ed. Muḥammad Dabīr Siyāqī, jild 3, Tehran, 1342.
- TJA: Aḥmad al-Ghaffārī Qazwīnī, *Tārīkh-i Jahān-arā*, ed. Muḥtabā Mīnuwī, Tehran, 1343.
- TR/Fard: Mīrzā Muḥammad Ḥaydar Dughlāt, *Tārīkh-i Rashīdī*, ed. 'Abbāsquḷī Ghaffārī Fard, Tehran, 1383.
- TR/Or: Mīrzā Muḥammad Ḥaydar Dughlāt, *Tārīkh-i Rashīdī*, MS., British Library, Or. 157.
- UA: 'Abd ūl-Ghaffār Qırımı, *'Umdet ūl-Akḥbār*, MS., Süleymanīe Kütüphanesi, Esad Efendi 2,331.
- ẒN: Sharaf al-Dīn 'Alī Yazdī, *Ẓafar-nāma*, facsimile, ed. A. Урунбаев, Шараф ад-Дйн 'Али Йаздй, *Зафар-наме*, Ташкент, 1972.
- ZT: Ḥāfiẓ Abrū, *Zubdat al-Tawārīkh*, ed. Sayyid Kamāl Ḥājj Sayyid Jawādī, jild 4, Tehran, 1380.

参考文献

- Ахмедов, Б. А.: *Государство кочевых узбеков*, Москва, 1965.
- Allsen, Th. T.: "The Princes of the Left Hand: An Introduction to the History of the Ulus of Orda in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries," *Archivum Eurasiae Medii Aevi*, 5, Wiesbaden, 1987, pp. 5-40.
- Бартольд, В. В.: "Улугбек и его время," *Сочинения*, т. 2, ч. 2, Москва, 1964, pp. 25-196.

Barthold, W., [Hazai, G.]: “ҚАЗАҚ,” *Encyclopaedia of Islam*, new ed., vol. 4, Leiden, 1978, pp. 848-849.

DeWeese, D.: *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*, Pennsylvania, 1994.

Doerfer, G.: “qazāq,” *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen*, Band 3, Wiesbaden, 1967, pp. 462-468.

Федоров-Давыдов, Г.А.: *Общественный строй Золотой орды*, Москва, 1973.

Ибрагимов, С. К. 1960: “Еще раз о термине «казах»,” *Новые материалы по древней и средневековой истории Казахстана*, Алма-Ата, 1960, pp. 66-71.

—— 1961: “К истории Казахстана в XV в.,” *Вопросы филологии и истории стран советского и зарубежного Востока*, Москва, 1961, pp. 172-181.

История Каз: *История Казахстана с древнейших времен до наших дней: в пяти томах*, т. 2, Алматы, 1997.

История Каз лит: *История Казахской литературы: в трех томах*, т. 2, Алма-Ата, 1979.

Kafalı, M.: *Altın Orda Hanlığının Kuruluş ve Yükseliş Devirleri*, İstanbul, 1976.

Кляшторный, С. Г., Султанов, Т. И.: *Казахстан: Летопись трех тысячелетий*, Алма-Ата, 1992.

МИКХ: *Материалы по истории Казахских ханств XV-XVIII веков (извлечения из персидских и тюркских сочинений)*, ed. С. К. Ибрагимов, Н. Н. Мингуров, К. А. Пищулина, В. П. Юдин, Алма-Ата, 1969.

Пищулина, К. А. 1977: *Юго-восточный Казахстан в середине XIV-начале XVI веков (Вопросы политической и социально-экономической истории)*, Алма-Ата, 1977.

—— 1981: “Казахское ханство во взаимоотношениях с Могулистаном и Шайбанидами в последней трети XV века,” *Казахстан в эпоху феодализма (Проблемы этнополитической истории)*, Алма-Ата, 1981, pp. 96-123.

Сафаргалиев, М. Г.: *Распад Золотой Орды*, Саранск, 1960, репр., *На Стыке Континентов и Цивилизаций...: Из опыта образования и распада империй X-XVI вв.*, Москва, 1996.

Schamiloglu, U.: “The *Umdet ül-Ahbar* and the Turkic Narrative sources for the

- Golden Horde and the Later Golden Horde,” *Central Asian Monuments*, ed. H. B. Paksoy, Istanbul, 1992, pp. 81-93.
- Султанов, Т. И. 1971: “Некоторые замечания о начале казахской государственности,” *Известия АН КазССР. Серия общественная*, 1971, No. 1, pp. 54-57.
- 1975: “Письмо золотоордынского хана Улуг-Мухаммада турецкому султану Мураду II,” *Тюркологический сборник 1973*, Москва, 1975, pp. 53-61.
- 2001: *Поднятые на белой кошме: Потомки Чингиз-хана*, Алматы, 2001.
- 2005: “Известия османского историка XVI в. Сейфи Челеби о народах Центральной Азии,” *Тюркологический сборник 2003-2004*, Москва, 2005, pp. 254-272.
- Togan, A. Z. V.: *Bugünkü Türkili (Türkistan) ve Yakın Tarihi*, cilt 1, Batı ve Kuzey Türkistan, 2 Baskı, İstanbul, 1981.
- Трепавлов, В. В.: *История Ногайской Орды*, Москва, 2001.
- Ускенбай, К. 2001: “Преемственность внешнеполитических приоритетов: от Ак-орды Урус-хана до Казахского ханства,” *Отан тарихы-Отечественная история*, 2001, No. 3, pp. 129-134.
- 2002: “Восточный Дашт-и Кыпчак в XIII-XIV веках. Из истории Ак-орды,” *Вопросы истории Казахстана: Исследования молодых ученых*, вып. 3, Алматы, 2002, pp. 7-37.
- 2006: “Улусы первых Джучидов. Проблема терминов *Ак-Орда* и *Кок-Орда*,” *Тюркологический сборник 2005: Тюркские народы России и Великой степи*, Москва, 2006, pp. 355-382.
- Усманов, М. А.: *Татарские исторические источники XVII-XVIII вв.*, Казань, 1972.
- Юдин, В. П. 1992: Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме*, Факсимиле, перевод, транскрипция, текстологические примечания, исследование В. П. Юдина, Подготовила к изданию Ю. Г. Баранова, Комментарии и указатели М. Х. Абусеитовой, Алма-Ата, 1992.
- 2001: *Центральная Азия в XIV-XVIII веках: Глазами востоковеда*, Алма-

ты, 2001.

赤坂恒明:『ジュチ裔諸政権史の研究』風間書房, 2005.

宇山智彦:「カザフ民族史再考:歴史記述の問題によせて」『地域研究論集』
2-1, 1999, pp. 85-116.

川口琢司 1997:「キプチャク草原とロシア」『岩波講座世界歴史11 中央ユー
ラシアの統合 9-16世紀』岩波書店, 1997, pp. 275-302.

—— 2002:「ジョチ・ウルスにおけるコンクラト部族」『ポストモンゴル期
におけるアジア諸帝国に関する総合的研究』平成11年度～平成13年度科
学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書(研究代表者, 志茂碩敏),
2002, pp. 75-92.

川口琢司, 長峰博之:『チンギズ・ナーマ (*Čingiz-nāma*)』ウテミシュ・ハー
ジー (*Ötāmiš Hāji*) 著, 解題・訳註・転写・校訂テキスト, 川口琢司・長
峰博之編, 菅原睦校閲, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所,
2008.

小松久男:「ウズベク [人]」『中央ユーラシアを知る事典』小松久男・梅村
坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編, 平凡社, 2005, p. 79.

佐口透 1979a:「カザフ・ハン国の史的概観」『月刊シルクロード』5-2,
1979, pp. 71-76.

—— 1979b:「モンゴル帝国の継承国家について」『月刊シルクロード』5-8,
1979, pp. 14-19.

野田仁 2005:「《集史》」『中央ユーラシアを知る事典』小松久男・梅村坦・
宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編, 平凡社, 2005, p. 247.

—— 2007:「カザフ・ハン国とトルキスタン—遊牧民の君主埋葬と墓廟崇拜
からの考察—」『イスラム世界』68, 2007, pp. 1-24.

堀川徹 1979:「ウズベク族とティムール朝」『月刊シルクロード』5-2, 1979,
pp. 66-69.

—— 1980:「ウズベク族とカザフ族の『分離』について」『宋元代の社会と
宗教の総合的研究 研究報告』昭和54年度科学研究費補助金総合研究
(A)(研究代表者, 竺沙雅章), 1980, pp. 53-63.

—— 1990:「遊牧ウズベク史研究(1)」『COSMICA』20, 1990, pp. 165-177.

長峰博之:「『キプチャク草原の港』スグナク—1470～90年代のトルキスタン

地方をめぐる抗争とカザクのスグナク領有を中心に―』『史朋』36, 2003, pp. 1-23.

註

- (1) キプチャク草原を中心にチンギス・カンの長子ジョチの子孫を君主として戴いた遊牧政権で、一般にわが国では「キプチャク・ハン国」「金帳汗国」とも呼ばれる。
- (2) 「カザク・ハン国」という用語は研究上の概念であり、一般にわが国では「カザフ・ハン国」もしくは「カザーフ・ハン国」と表記される。本稿では、当時の史料中の「カザク (qazāq)」という表記にもとづいて、「カザク・ハン国」とする。
- (3) 本史料には多くの写本が存在するが、本稿では、写本 British Library, Add. 24,090を底本とする校訂本 TR/Fard を写本 TR/Or と比較しながら用いる。
- (4) 「チューとコジ・バシユ地方 (ṭaraf-i Jū wa Qūjī Bāshī)」とは TR/Or の表記であり [TR/Or: 57a]、TR/Fard では “ṭaraf-i Jūd Qūjī Bāshī” とされている。チュー河流域が冬営地、コジ・バシユが夏営地である [МИКХ: 523, n. 33]。
- (5) 「ウズベグ」という名称の起源や歴史的変遷についてはさまざまな議論がなされてきたが [cf. 堀川 1990: 165-168; 赤坂: 214-218]、起源については、ジョチ・ウルスのウズベグ・ハンに由来するという説が有力となっている [赤坂: 227-231; 小松]。その歴史的変遷については、今後さらに慎重に議論されるべき問題であろう。
- (6) 例えば、C. K. イブラギモフは、最終的な独立国家形成を16世紀30～40年代とした [Ибрагимов 1961: 172, 180-181]。これに対して、スルタノフは、形成期を早めて15世紀70年代以後とし [Султанов 1971: 57]、のちにさらに限定して873 (1468/69) 年 (アブールハイルの没年) 以後とした [Султанов 2001: 133]。
- (7) 一方、民族史観から完全に自由ではないが、慎重な態度を取る研究者もいた。イブラギモフは、「カザク」という用語は15世紀末から「ウズベグ」という用語に対して政治的特質を帯び、16世紀初頭から民族的特

質を帯び始める、と述べている [Ибрагимов 1960: 71]。

- (8) 例えば、K. ウスケンバイは、ジョチ・ウルス左翼の時代に「カザフ国民国家」としての「カザク・ハン国」が形成されつつあったが、オロス死後のジョチ家の内訌やティムール朝の攻撃がその形成過程を妨害した、と述べている [Ускенбай 2001: 132]。
- (9) 一方、「カザフ人」の民族意識に注目した宇山智彦氏は、「カザフ・ハン国の形成・強化の時代（15世紀後半～16世紀初め）をカザフ・ナロードノスチ形成の『完遂』の時期」とする説は再検討されるべきと問題提起し、「『カザフ人』としての民族意識が強固に認められるのは、17～18世紀のジュンガルとの対抗、特に1720年代のアクタバン・ジュブルンドウ [ジュンガルの襲撃による破滅的な危機] 以降」と指摘している [宇山: 96-97, 111]。
- (10) ユーゼンはこうした史料を「草原の口承史料 (степная устная историография/историология)」と呼んだが [Юдин 1992: 25-26, 57]、口頭伝承性が強調されてしまい、誤解を生む名称となった。例えば、16世紀半ばまでに「ヒヴァ・ハン国 (アラブシャー朝)」で著された『チンギズ・ナーマ (ドゥースト・スルターン史。ChN)』の記述からは、情報源とした記述史料などの存在や、著者ウテミシュ・ハーギーの慎重な史料批判的態度を読み取ることができ、同史料が史書としての性格を有していることがわかる [川口, 長峰: xxi-xxiii]。『チンギズ・ナーマ』については、タシュケント写本を底本とした校訂テキストを含む川口氏との共同研究を上梓することができたので、これを参照されたい。
- (11) 本史料は、ロシア皇帝のボリス・ゴドゥノフへの献辞、著名なラシードウッディーンの『集史』のテュルク語抄訳、オラズ・ムハンマドにいたるまでのオロス家をはじめとしたジョチ家の諸王統とマンガト部の事績から成っており、14～16世紀のキプチャク草原世界について独自の情報を含む。本史料に関する研究としてはУсманов: 33-96、また、野田 2005も参照。現在知られている写本 5 種類のうち、最後の部分を含むのはサンクト・ペテルブルグ写本とカザン写本の 2 種類のみであり (D. デウィースが紹介しているパリ写本 [DeWeese: 382, n. 123] は最後の部分を含んでおらず、内容的にもカーディル・アリー・ベグによるものなの

- か、慎重な検討を要するように思われる)、欠落のある前者にもとづく И. Вележин校訂本 JT/Березин と、両写本を参照するが誤りの多いキリル文字転写本 Р. Сыздыкова, М. Қойгелдиев, *Қадырғали би Қосымұлы және оның Жылнамалар Жинағы*, Алматы, 1991が刊行されている。本稿では、筆者が実見調査することのできたカザン写本 JT/Т を JT/Березин と比較しながら用いる。本史料については稿を改めて論じる予定である。
- (12) 本史料の写本 UA は、川口氏の御厚意により利用することができた。ここに記して謝意を示したい。本史料については、Schamiloglu: 88-93、川口 2002: 91, n. 17を参照。
- (13) ティムール朝史料の『ムイーン史選』およびこれを情報源とする諸史料は、ジョチ・ウルス右翼を「キョク・オルダ (青帳)」、左翼を「アク・オルダ (白帳)」と伝えているが、他の諸史料によれば実際には逆であったことが明らかにされている [Сафарғалиев: 289-290; Федоров-Давыдов: 141-144; 堀川 1990: 165-177; Юдин 1992: 26-28]。この問題については、シバン家のウルスの位置づけなどをめぐって諸説が展開されており [cf. История Каз: 106-116; Ускенбай 2006: 365-382]、いずれ稿を改めて論じてみたいと思っている。
- (14) スグナクは、キプチャク草原世界とマー・ワラー・アンナフルの境界の交易の要所であり、のちには「キプチャク草原の港」と謳われた都市であった。左翼がシル河中・下流域に本営を移して以後、スグナクは左翼の政治・軍事・経済的拠点として、また冬营地、そして墓廟都市として、その中心都市となった [長峰: 1-8]。
- (15) オロスの系譜についてはオルダ系とトカ・テムル系の2説が議論されてきたが [cf. 堀川 1980: 57-59]、オルダ系説は系譜や年代に問題の多い『ムイーン史選』に依拠しており、トカ・テムル系説がほぼ定説とされている [Юдин 1992: 67; 川口 1997: 289; 赤坂: 83-84]。スルトノフやウスケンバイによってオルダ系説が再提示されているが [Султанов 2001: 139-144; Ускенбай 2002: 37]、前者は根拠薄弱であり [赤坂: 272-273, n. 5; 長峰: 6, n. 23]、後者は依然として『ムイーン史選』に依拠している。
- (16) オロス軍とトクタミシュ軍の戦いについて、ティムール朝史料は簡略にしか触れていないが、ユーザンは『チンギズ・ナーマ』の詳細な記

述を紹介している。そこでは、トクタミシュの息子ジャラルッディーン・スルターンがオロスを殺害したと伝えられている [ChN: 41-44; Юдин 1992: 76-82]。一方、『集史』によれば、オロスは北方のキシティムという場所で死んだという [JT/T: 60b]。

- (17) ティムール朝史料のヤズディーの『勝利の書 (Z̤N)』や系譜史料『ムイヅルアンサーブ (MA)』などによれば、テムル・マリクはオロスの息子である [Z̤N: 66b, 159a; MA: 27a]。これに対して、赤坂氏は、このテムル・マリクはトカ・テムル家のノムカン裔のテムル・ベグの誤りであるという説を提示している [赤坂: 44, 87-89]。現時点ではテムル・マリク／ベグと併記しておきたい。

- (18) 無名氏の『テュルク諸族の系譜 (ShA)』や『伝記の伴侶 (THS)』などは、ジョチ・ウルスの統治者を列挙するなかにバラクの名を挙げている [ShA: 128b; THS: 76]。

- (19) マンスールの母はバラクの姉妹スドゥ・ハヌムとされている。

- (20) マングト部 (ノガイ) については、B. B. トレパヴロフが包括的な研究を行っている。また、15世紀70～90年代の事例だが、オロス家とシバン家の抗争にマングト部の動向が与えた影響については、長峰: 10-11を参照。

- (21) スグナクにおけるオロスの具体的な建築活動は不明であるが、ジョチ・ウルス左翼に関連すると思われる建築物や聖者廟の存在が伝えられている [cf. 長峰: 5, 7, n. 29]。

- (22) サファヴィー朝史料の『ハイダル史』やシルトベルガーの『異国流離譚』なども同様の内容を伝えている [cf. Сафаргалиев: 455-456; Кляшторный, Султанов: 209]。

- (23) 「ビー (bi)」は JT/T の表記であり、JT/Березин では「ベグ (beg)」と表記されている。

- (24) 『集史』によれば、エディギュの死後にマンスールはハージー・ムハンマドをハンとし、自身は彼のビー／ベグになったという [JT/T: 64b; JT/Березин: 156; Сафаргалиев: 454; Трепавлов: 93]。

- (25) カーディーとナウルーズを、M. A. ウスマノフは1人の人物とみなし [Усманов: 75]、野田仁氏は両者の名を地名と解釈して、バラクが

- 「サライチク近くのカス・ナウルーズの所で世を去った」としている〔野田 2007: 4〕。しかし、『集史』によれば、このカーディーとナウルーズはマンスールの異母兄弟（前 2 者は同母兄弟）の 2 人である〔JT/T: 63b〕。
- (26) 本史料には、他の諸史料には現れないバラクの弟ブレク・ブラド・スルターンなどが登場する点でも興味深い。本史料の当該部分はスルタンノフによっても紹介されている〔Кляшторный, Султанов: 209-211〕。また、現在所在不明となっている『チンギズ・ナーマ』の A. Z. V. トガンの私蔵写本にも同様の記述があったようである〔cf. Kafah: 42〕。
- (27) ジャニ・ベグとギレイは諸史料においては並列されることが多く、両者の関係には不明な点が多い。ジャニ・ベグの息子カスィムはギレイの息子ブルンドゥクに対して「父の慣習により」服従したとされており〔TR/Fard: 404〕、スルタンノフは、ギレイより年少のジャニ・ベグは「ハンの称号は帯びていたが、独立した統治者ではなかった」と考察した〔Султанов 2001: 148〕。一方、トレバヴロフは、ギレイがハンとなり、ジャニ・ベグは共同統治者として右翼（西部）を統治したという説を提示しているが〔Трепавлов: 103-104〕、年少の共同統治者が西部を統治するという説には問題があるだろう。
- (28) この時期のジャニ・ベグとギレイに関して、シャイバーン朝史料の『アプールハイル・ハン史（ТАКһ）』には言及がない〔Ибрагимов 1961: 177-178〕。ビシュურიナは、同史料がシバン家と対立するカザクのハンたちについて故意に沈黙したとするが〔Пищулина 1977: 258〕、両勢力が直接に衝突するにはいたらなかったと考えるのが妥当であろう。
- (29) アプールハイルは、1451年にアブー・サイドのサマルカンドにおける即位に助力した返礼としてウルグ・ベグの娘ラビーア・スルターン・ベギムを娶っている〔ТАКһ: 335b; Бартольд: 144; Ахмедов: 132-133; 堀川 1979: 67-68〕。
- (30) 本史料のジョチ家の歴史を扱う第 3 章は長らく МИКХ 所収のロシア語抄訳しか利用できない状況であったが、川口氏の御厚意により写本 ВА を利用することができた。ここに記して謝意を示したい。
- (31) アサン・カイグの詩にはトレバヴロフも注目しているが、この詩に見えるジャニ・ベグの行動をギレイ死後のハン位奪取のためとしている

[Трепавлов: 104]。

- (32) ピシュリーナは、エセン・ブガとユース兄弟の継承争いという当時のモグーリスターンの混乱した情勢から、ジャニ・ベグとギレイはエセン・ブガに臣従したわけではなく独立した勢力であった、と論じている [Пищулина 1977: 265-267]。
- (33) ユーゼンは、「カザク」の語源について22もの説を紹介・検討し、さらに仮説を提示している [Юдин 2001: 137-146, 156-166]。
- (34) 一方、16世紀の旅行家セイフィー・チュレビーは、かつてカザクのハンたちがブハラやタシュケントから草原に逃れたため、と説明している [Султанов 2005: 260-261]。
- (35) 「カザク」の呼称には多分に蔑称の感があったように思われる。しかし、のちに遊牧民のあいだではこのような「カザク的行為」は美德ともみなされたという [Togan: 39]。
- (36) 『シャイバーニー・ナーマ』において、ジャニ・ベグの息子マフムードがムハンマド・シャイバーニーの弟マフムードに殺害される場面で、前者の名に「カザク」と付記されている [ShN: 26]。これは同名の両者の混同を避けるためであろう。
- (37) 17世紀のヒヴァ史料であるアブルガーズィーの『テュルク系譜 (ShT)』は、「トカ・テムルの子孫のうちカザクにおいて君主 (pādshāh) となった者たち」としてオロスを祖とするオロス家の系譜を記している [ShT: 178-179]。このことは、オロス家に対して「カザク」という呼称が定着していたことと同時に、やはり王統による認識が重視されていたことを示している。

付記：本稿は平成18年度科学研究費補助金（奨励研究）の研究成果の一部である。